

日本語の無主語文をめぐって

新屋 映子

要 旨

日本語は主語を必須としない言語であり、文節順に強い拘束のない言語である。本研究ではそうした日本語の性質を具現する文構造を、朝日新聞の「天声人語」約1ヶ月分及びその英訳版を資料として、主語不在文の実態という側面から観察した。その結果、日本語の主語不在文に、主語相当句内在文・主語無表示文・無主語文・名詞句独立文・引用句独立文の5類型が認められること、及び、無主語文には名詞述語が多く関わっていることが明らかになった。無主語名詞文は、高文脈、主要部末端型、情報構造重視型、単肢型、情意的、名詞指向的などと言われる日本語の特質を集約的に具現しており、英語との差異を際立たせるものである。

【キーワード】 無主語文、主語不在文、名詞、名詞指向

1. はじめに

日本語の特徴とされることの一つに、日本語は主語を必須としない、というのがある。実際のところ日本語で主語のない文というのはどの程度産出されているのであろうか。また、主語のない文というのはどのようなものなのであろうか。本稿はこうしたことについて考えようとするものである。

日本語に主語という概念が有効であるか否かに関して、これまで多くの議論¹⁾がなされているが、本稿ではその議論には立ち入らない。仁田(2010)は、主語とは「事態がそれについて(それをめぐって)語ることになる存在・対象」であり、「述語の表す動き・状態・属性を体現し担う主体として、文の表している事態が、それを核として形成される、という事態の中心をなす要素」であると述べている。本稿ではこの仁田の意味的規定に従って述語で表わされる事態(動き、変化、状態、属性)の主体を表わすものを「主語」とし、その有無を観察する。

資料として用いたのは、「和英対照・天声人語」2010年8月21日～9月28日分(<http://astand.asahi.com/asahieng/jetenjin.html>)である。そこから得られた453文をデータとする。タイトル、言い差し文は対象としない。本稿は日英語の対照を旨とするものではないが、適宜、該当記事の英訳版を用いて、最も主語性の強い言語と言われる英語との比較を交えつつ考察することとする²⁾。

¹⁾ 三上(1959)、奥田(1985)、湯川(1971)、北原(1975)、柴谷(1985)、鈴木(1992)、益岡(2000)、西村(2004)、野田(2004)、丹羽(2004)、松本(1991)など。

2. 主語の有無による文分類

2.1 省略について

主語があるのかないのかを考えようとするときに問題となるのは〈省略〉という概念である。主語に相当する表現を欠いている場合、それが省略なのか、本来主語がないのかを判断することは簡単ではない。一般に、一人称主体、総称主体、あるいは前文の主語や目的語を先行詞とする場合に主語を省略することができるという理解がある(久野1978、砂川1990など)。しかし、例えば(1a)の第2文には主語がないが、「月」の省略とは言い切れない。(1a)と、主語を復元した(1b)は意味的に等価とは言えないからである。

(1a) 月が出た。とても明るい。

(1b) 月が出た。[月は／月が]とても明るい。

(2a)と(2b)も同様である。両者における話し手と聞き手の人間関係、距離は同等ではない³⁾。

(2a) こんにちは、営業部の田中です。

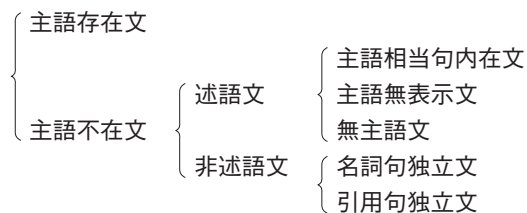
(2b) こんにちは、私は営業部の田中です。

池上(1983)は、日本語の文の構造においては、英語の主語に相当するものが義務的に選択される必要はなく、「その部分は必要なら加えてもよいといった性質のものであり、本来そのような性質であるものについて「省略」ということを言うのはおかしい」(pp.19-20)と言う。このように、省略の認定は困難であるため、本稿では「主語省略」という用語を避け、文中に主語が見当たらないものを一括して「主語不在文」とする。

2.2 主語の有無による文分類

主語の有無を基準としてデータを分析した結果、表1のような類型を得た。

表1 主語の有無を基準とした文分類



まず、全体は主語存在文と主語不在文に二分される。主語存在文というのは、(3)のよ

²⁾ Li and Thompson (1976) は Subject-prominent language、Topic-prominent language という言語類型を提唱した。Li and Thompson によれば、印欧語は Subject-prominent language、中国語は Topic-prominent language、日本語は Subject-prominent and Topic-prominent language とされている。なお、英訳との比較に当たっては、英文が日本語からの翻訳である点に留意する必要がある。

³⁾ 例えば、(2a)における話し手と聞き手とは旧知であるが、(2b)における話し手と聞き手とは初対面というような違いがある。

うに主語が顕在している文である。

(3) さすがは奇想の食通というべきか、作家の嵐山光三郎さんが「でこぼこ道の効用」について書いている。(9.28)⁴⁾

主語不在文というのは、省略か否かを問わず、表面上主語を欠いている文である。主語存在文には、言い差しでない限り述語も存在するが、主語不在文には述語を持つものと述語のないものがある。述語のある文を述語文⁵⁾、述語のない文を非述語文とする⁶⁾。ただし、〈何を主語とするか〉と同時に、〈何を述語とするか〉も実は難しい問題である。本稿では、「のだ」「わけだ」「はずだ」などのモーダルな形式名詞を含む文末形式、伝聞の「という」「と聞く」などの文末形式を助動詞相当のものとし、それらの前接部までを述語としたが、問題は残る。述語文はさらに主語相当句内在文・主語無表示文・無主語文に、非述語文は名詞句独立文・引用句独立文に分けられる。主語相当句内在文というのは、(4)のように、従属節内に主節の主語に当たるものが含まれている文である。(4)の主節「何を思う」の主語は従属節内の「河合さん」である。

(4) 河合さんが健在なら何を思うだろう。(9.17)

主語無表示文というのは(5)のように前後の文脈から主語相当の名詞を具体的に特定できるものである。(5)の「言いつけた」主体は前文中の「父親」である⁷⁾。

(5) 戦争の末期、妹を学童疎開に出した思い出を向田邦子さんが書いている。まだ字のおぼつかない妹に、父親は自分の宛名を書いたはがきをたくさん持たせた。「元気な時は大きいマルを書いて毎日出すように」と言いつけたそうだ。(9.24)

無主語文というのは、(6)のように、主語を明確に補うことができないものである⁸⁾。

(6) 旅の空から絵はがきを出す。美しい風物と背中合わせに、道中の無事を告げる習いである。(8.21)

(7)のように、主語相当の名詞を具体的に特定することはできないが、先行文脈から主語が漠然と想定できる文脈内陰題文のようなものも無主語文とする。

(7) 固有の領土に毅然はむろんだが、そうした収め方を探れるか否かで、菅内閣の器も

4) 末尾の数字は新聞の発行日を示す。例文中、記述の対象となる箇所の下線を施すことにする。

5) 永野(1985)の「述語文」は「地震だ。」のような本来的無主語文を指す。

6) 非述語文は「独立格の文」(時枝1954)、「独立語構文」(国立国語研究所1963)、「一語文」(鈴木1972)、「独立語文」(南1993)、「未分化文」(益岡1991)などと呼ばれる。主語は述語の存在を前提とした概念であるから、非述語文に主語がないのは当然である。

7) 主語無表示文が成立する背景の一つとして、主観述語の人称制約により主語を必要としないという事情もある。

8) 三上(1970)は「省略の法則」として「略題」5原則、「無主格文」8原則を提示し、後者に「ある日の暮方のことである。」(羅生門)、「春です。うらかな天気です。」などの例を挙げている。

問われよう。試金石にして、正念場である。(9.22)

名詞句独立文というのは、(8)のように名詞句の形式をとった非述語文である。

(8) 世相小話をつないで、歌あり客いじりありの異形の高座。(9.19)

引用句独立文というのは、(9)のように引用部分で終止している非述語文である。

(9)「肅々」という表現を使ってよく知られているのは、江戸時代の儒学者、頼山陽の漢詩だろう。「鞭声肅々夜河を過る……」。(9.22)

以上、主語存在文、主語相当句内在文、主語無表示文、無主語文、名詞句独立文、引用句独立文の6類型が本稿で用いる文の下位類である。

3. 主語の有無を基準とした各類型の分布

表2は、前節で提示した分類に基づいて、各類型の出現数を調査した結果である。

表2 主語の有無を基準とした文各類型の分布

主語存在文……………	278 (61.4%)	} 計453 (100%)
主語相当句内在文……………	8 (1.8%)	
主語無表示文……………	91 (20.1%)	
無主語文……………	46 (10.2%)	
名詞句独立文……………	12 (2.6%)	
引用句独立文……………	18 (4.0%)	

6類型のうち、最も多いのは主語存在文で、全体の61.4%を占めている。日本語は主題優先であり、主語性は弱いとされる。しかし、資料が書き言葉であることを考慮に入れても、61.4%という主語明示率は稿者の予想を超える高い数値であった。これには、「天声人語」がエッセイ的な文章ではあるが身辺雑事ではなく社会性のある論評であること、また、一般に主語省略率の高い1・2人称主体の会話文がないことなどが関係するのであろうか⁹⁾。

データの英訳に現れたのは主語存在文のみで、それ以外の5類型は見られなかった。名詞句独立文も引用句独立文も英訳では述語文ないし述語文の一部として表現されている。前節に挙げた名詞句独立文と引用句独立文の英訳は以下の通りである。

(10=8) 世相小話をつないで、歌あり客いじりありの異形の高座。

Sanpei broke tradition by ad-libbing social commentaries, singing songs and singling out members of the audience to engage them in banter.

⁹⁾ 因みに小説『女社長に乾杯!』における会話文(訴え文、独立語文、言い差し文を除く冒頭からの383文)を調べたところ、主語存在文167(43.6%)、主語無表示文176(46.0%)、無主語文40(10.4%)という結果であった。盛(2006)は『雪国』の主語明示率を調査し、原文55.8%、3種の中国語訳がそれぞれ85.1%、85.7%、95.3%、英訳98.0%と報告している。

(11=9)「粛々」という表現を使ってよく知られているのは、江戸時代の儒学者、頼山陽の漢詩だろう。「鞭声粛々夜河を過る……」。

A Chinese-style poem by Rai Sanyo (1780-1832), a Confucian scholar of the Edo Period (1603-1867), is well known for using the expression *shukushuku* (quietly or solemnly): “Bensei *shukushuku*/ *Yoru kawa o wataru*” (Paying attention to the sound of whips, [they] cross the river at night).

引用句独立文の英訳の多くは(11)のようにコロン「:」の後に引用部を提示するもので、半ば独立語文的であり、原文の形式に通じるところがある。主語の有無、主語を想定し得る可能性、自立度(引用句独立文と英訳の引用部)等の側面から見て、原文と英訳との間で質的な乖離の最も大きいのは無主語文と名詞句独立文と言える。ただし、最も主語性が強いと言われる英語であるが、無主語文が存在しないわけではない。ポウグラント、ドレスラー(1981)は英語においても「独立節で主語を省略するのはそう珍しいことではない」とし、(12)のような例を挙げている(p.91)。

(12) He's always asleep. Goes on errands fast asleep... (あの子はいつも眠っている。ぐっすり眠ったまま使いに行くんだ...)

英語の無主語文というのは極めて有標であるために、本稿のデータに現れなかったに過ぎない。英語における主語の必要性に関しても相対的な認識が必要であろう。

4. テアルと動詞のコロケーション

本節では、述語文の各類型について、述語の品詞との関係を見ることにする。表3、図1はその調査結果である。「他動詞使役形」「他動詞受身形」というのは品詞名ではないが、別立てとした¹⁰⁾。図1では、用例数の少ない「主語相当句内在文」、「他動詞使役形」、「意志自動詞」、「その他」は除かれている。

表3 述語文各類型における述語の品詞

	他動詞使役形	他動詞	意志自動詞	無意志自動詞	他動詞受身形	形容詞	名詞	その他	総計
主語存在文	2	50	7	112	14	39	50	4	278
主語相当句内在文	0	2	0	4	0	1	1	0	8
主語無表示文	1	42	1	13	6	10	15	3	91
無主語文	0	7	0	8	2	5	24	0	46
総計	3	101	8	137	22	55	90	7	423

¹⁰⁾ 「その他」は「しかりだ。」「恐るべしである。」「(病は)気からだ。」のようなものである。

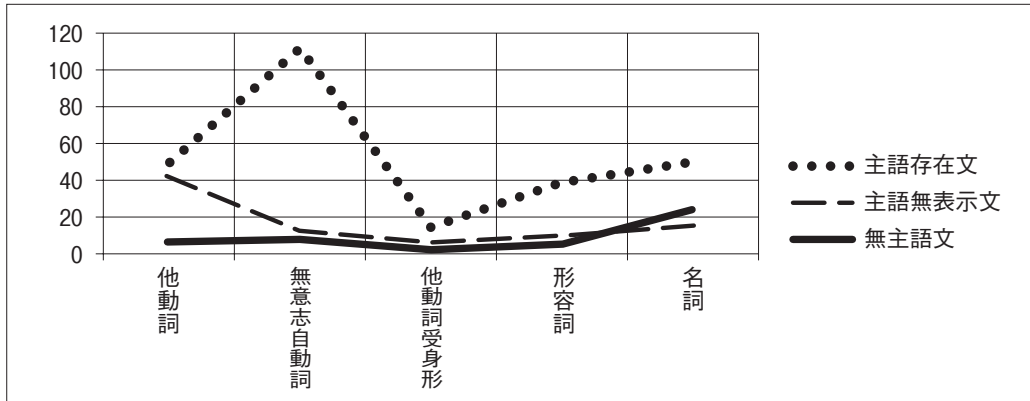


図1 述語文各類型における述語の品詞

表3・図1に示されているように、主語存在文の述語には無意志自動詞が最も多く、主語無表示文には他動詞述語が最も多く、無主語文には名詞述語が最も多いという興味深い結果となった。無意志自動詞の多さは日本語のナル言語性を反映している。主語無表示文に相対的に他動詞述語が多いのは、(13)のように、先行文と主語(主題)を共有し、一連の動きを述べるという文脈で主体表示の反復が避けられているためである。

- (13) その子は継父に日記をつけるよう命じられ、毎日「お父さん大好きです」などと書いていたそうだ。だが、殴られたりした日には、気づかれぬよう日記に印をつけていた。(9.24)

では相対的に名詞述語の多い無主語文とはどのようなものであろうか。

5. 無主語文

無主語文には以下のような類型が見られる。英訳と対照しつつ見ることにする。なお無主語文の類型化に当たっては三上(1970)が参考になった¹¹⁾。

A. 「(～)になる」を述語とする文

(14) (15)は変化動詞「なる」を述語としており、結果を表わす二格が主語相当の意味を担っているものである。英訳は(14)では「昭和の爆笑王」である“Sanpei”が主語として設定され、原文の述部「30年になる」は副詞句として訳されている。(15)の英訳では原文の述部「無い物ねだり」の主体“I”が主語であり、「無い物ねだり」が動詞句として表わされている。

- (14) 早いもので、「昭和の爆笑王」が鬼籍に入って明日で30年になる。(9.19)

Dubbed “Showa no Bakusho-o”, Sanpei died Sept.20, exactly 30 years ago.

¹¹⁾ ただし三上(1970)の記述対象は無主格文であり、本稿とは基準を異にする。奥津(1975)は「無主語文は、自然現象、一般的状況、感覚、存在などを表わすものに多い」と述べている。

- (15) 爆笑王への郷愁、詰まるところ右肩上がりへの憧れらしい。懐かしむつもりが、ついつい無い物ねだりになった。(9.19)

In recalling the King of Guffaws with fond nostalgia, I suppose I'm actually yearning for what our country is sadly missing today—an era of sustained growth.

「なる」と結合する結果の二格は「実[に／が]なる」のようにガ格に連続的であることを考えると、二格が主格に代わり得ることは不思議ではない¹²⁾。

B. 主語的引用句を有する文

(16) (17) は引用句が意味的に主語に相当する文である。(16) は存在文、(17) も広義存在文である。英語では共に原文のナル表現がスル表現に訳されている。

- (16) 絵日記の初日に、〈白連車¹³⁾〉でお祭りに行きましたとあった。(9.4)

The first entry in Yasuko's diary describes a summer festival she went to by bicycle.

- (17) 明快な無罪判決のあと、〈特捜が特高になる恐ろしさ〉と川柳欄に載った。(9.23)

After Muraki was acquitted, the vernacular Asahi Shimbun's senryu section ran the following satirical poem: "How scary that tokuso can turn into tokko."

三上(1970)は「伝達動詞を受身か自発にすると、引用文を代役とする無主格文が得られる」(p.167)としているが、この類の述語は受身・自発に限らない。なお、(16) (17) のような例はそれぞれ、「(～と)記述が(あった)」、「(～と川柳欄に)川柳が(載った)」という主語を想定することができる。歴史的な経緯の中で主語省略の慣用化が進んだのであろうか。

C. 汎称主体の文

(18) の述語は「表した」、(19) の述語は「覚える」であるが、主体は表わされていない。これは主体を言挙げする必要のない汎称主体の文だからである。英語では音形のない汎称主体は定形節の主語位置には現れないため、(18) では“we”が、(19) では“one”が主語として設定されている。先の(6)もこの類である。

- (18) その秋風を、日本では「色なき風」と表した。(9.16)

In Japan, we describe an autumn wind as “colorless.”

¹²⁾ 結果の二格に連続するガ格の例は、「集金するだけ集金しての計画倒産。そのような事がならないか」(Yahoo!知恵袋:2005)、「いつか復興になるかもしれない」(少納言:アウトブリード)、「弱体な御家の存続になるかどうか」(少納言:喜知次)、「基地の恒久化になった」(少納言:辻の華)等、枚挙にいとまがない。韓国語では「もうすぐクリスマスの時期になる」式に結果が主格で表わされるという。

¹³⁾ 原文のママ

(19) 激しい季節の終わりには、子どもならずとも一抹の寂しさを覚える。(8.28)

One does not have to be a child to feel a tinge of sadness at the end of this frenetic season.

D. 端折り文

三上(1970)は、「端折りや陰題で“ガ”が文面から消えている場合」があり、「あっ雨が降ってきた。」を端折ると「あっ雨だ。」となって“ガ”が消える。」とし、「お訪ねするとの返事だった。(返事ガ来タ)」「そこへ急を知らせる電報です。」等の例を挙げている(p.165)。(20)(21)は必ずしも「ガ」が消えたものとは言えないが、端折りの文の一種と考えることができる。(20)は「もう少しの我慢が必要だ／もう少し我慢すればよい」、(21)は「間もなく命日が来る」といった命題(コト)の述部を端折って、それぞれ「我慢」「命日」という名詞に収束した形である。英訳は(20)では「我慢」の主体“we”が主語、(21)ではまさしく「命日が来る」という訳になっている。

(20) 安らぎの季節まで、もう少しの我慢である。(8.28)

We'll have to persevere a bit longer until the arrival of soothing autumn.

(21) 間もなく命日である。(9.3)

The anniversary of the boy's death falls on Monday.

こうした表現を可能にする要因の一つに、動作名詞という動詞的な性質を持つ名詞の存在がある。

E. 逆順的な文

(22a)の述語名詞「日本」とその連体部「新しい時代を作りあぐねる」とは意味上主述関係にあり、(22b)のように言い換えても素材的意味に変動はない。(23a)の述語名詞「土俵」とその連体部も同様で、素材的意味を変更することなく(23b)のように言い換えることができる。無主語文の中にはこのように述語名詞句の連体部と主名詞が、論理的な述語—主語(主題)といった逆順的な関係になっている文がある。

(22a) ひとつの時代が終わり、新しい時代を作りあぐねる日本である。(9.15)

An era has certainly ended, but Japan has yet to build a new one.

(22b) ひとつの時代が終わり、日本は新しい時代を作りあぐねている。

(23a) 戦後の食糧難の中、空腹に耐えて滝の汗を流したのは、関取になるまで帰らないと決めていたためだ。美しい土俵だった。軽量ながら、全身これ筋肉。上体の動きに連動して、太ももからふくらはぎに彫刻のような陰影が走った。(9.3)

In the dohyo ring, Wakanohana was nothing but beautiful.

(23b) (彼の)土俵は美しかった。

三上(1970)はこうした文を「陰題」と称している。逆順的な文では伝えるべき情報は

主名詞の連体部にあり、主名詞は主題に相当する。

F. 文脈内陰題文

(24) (25)の下線部は先行文脈で叙述された状況を主題として措定した文で、表示されない主語の先行詞を先行文脈内にそれと特定できないものである。前後の意味関係は読み手に委ねられるが、(24)の文連結には例えば「そのような豪華な土俵入りができた。こうした時代はよき時代だった。」といったつながりを読み取ることができ、(25)には例えば「強く狂おしい夏が平年の比ではないほどの気だるさを残している。この時期は心身をしばし横たえる頃合いだろう。」といったつながりを見ることができる。このように当該文の主題は文脈から漠然と感じられるのみで、非明示的であるものを「文脈内陰題文」とする。先の(7)もこの類である。英訳の主語は(24) (25)共に非人称の“it”となっている。

(24) 断髪式前の土俵入りは、太刀持ちが大鵬、露払いが柏戸という豪華版。よき時代だった。(9.3)

It was the golden age of sumo.

(25) 強く狂おしい夏は、残していく気だるさも平年の比ではない。優しい秋を待ちながら、くたびれた心身をしばし横たえる頃合いだろう。(8.28)

It's time to rest our exhausted minds and bodies while waiting for merciful autumn.¹⁴⁾

以上がデータに見られた無主語文の分類である¹⁵⁾。表4に無主語文各類の用例数を示す。

表4 無主語文各類の用例数

無主語文	用例数(名詞述語文数)
A. (～ニ)ナルを述語とする文	3
B. 主語的引用句を有する文	6
C. 汎称主体の文	11
D. 端折り文	3 (3)
E. 逆順的な文	7 (7)
F. 文脈内陰題文	16 (14)
計	46

用例数の()内は名詞述語文の数である。第4節で、無主語文の述語で最も多いのは名詞であることを指摘したが、それは表4に明らかのように無主語文のうちでも端折り文・逆順的な文・文脈内陰題文によるものであった。名詞を述語とする無主語文とはどのよう

¹⁴⁾ 本データにはなかったが、無主語文には〈時の副詞句+デアル〉のような形式もある。小説や随筆等で多用されるものである。例：私がシャッターを切ると、興奮してキャーキャーとかしましい。その時である。父親である運転手が、いきなり部屋に入ってきて、大声で怒鳴りつけた。(大高美貴「蒙昧な国」『文藝春秋』77.04)

¹⁵⁾ 広い意味で端折り文・逆順的な文・文脈内陰題文はいずれも逆順的である。

な文であろうか。次節では名詞を述語とする無主語文（以下「無主語名詞文」と称する）に焦点を当てる。

6. 無主語名詞文（端折り文、逆順的な文、文脈内陰題文）の機能

日本語の名詞文を意味構造を基準に分類した論考の主なものに、三上（1953）、上林（1988）、西山（1990）、坂原（1990）がある。三上は名詞文を第一準詞文、第二準詞文、第三準詞文に、上林は措定文、指定文、倒置指定文に、西山は措定文、倒置指定文、倒置同一性文、倒置同定文、指定文、同一性文、同定文に、坂原は記述文、同定文に分類している。これらは相違点も少なくないが、「措定文」（三上の「第一準詞文」、坂原の「記述文」、「倒置指定文」（三上の「第二準詞文」、坂原の「同定文」）の設定において共通している。いずれも主語を持つ無標の名詞文を対象とした記述であるから、名詞を述語とする無主語文（無主語名詞文）という有標な文を通常の名詞文と同列に置くことはできないが、あえてそれらに準じて考えるとすれば、無主語名詞文の過半数を占める文脈内陰題文は広義措定文である。措定文とは（26）のように、述語名詞が主語の属性を述べる文であるが、文脈内陰題文は前文脈の内容を実質的な主語（主題）とし、それを受けて著者の感慨、認識、評価等を述語名詞で表現している。

（26）ある時代、「型破り」はほめ言葉だった。（9.19）

（27）～（30）における無主語名詞文の主題は、（27）では前2文に表わされた内容、（28）では「出番前、共演者と談笑していても父親の手は冷たく汗ばんでいたこと」、（29）では仲麻呂の運命を背景としたベトナムと唐土、（30）では前6文の内容である。こうしてみると、文脈内陰題文というのは、一文内に収まりきれない主題を文脈に依存する名詞文と言えるかもしれない。

（27）近年はNHKの教養番組「美の壺」の案内役で、落ち着いた味を醸していた。和服が似合い、書画を愛でても、焼き物をなでても、軽妙洒脱で味わい深かった。音楽と笑いから出発した芸能人生の、見事な成熟でもあったろう。（9.14）

（28）出番前、共演者と談笑していても父親の手は冷たく汗ばんでいたと、次男の二代三平（39）が『父の背中』（青志社）に書いている。はぐれぬよう楽屋ですっと手を握っていた者だけが知る緊張だ。

（29）仲麻呂は帰国の船が難破して沈んだと思われたが、今のベトナムに漂着し、唐に戻って異土で没した。〈天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出し月かも〉はその帰路につく前の望郷の歌として知られる。だが作家の竹西寛子さんは、「唐土（もろこし）に心を残している人の歌」でもあると見る。今ふうには言え「二つの祖国」だろうか。

（30）ペニシリンに始まる抗生物質は「20世紀の奇跡の薬」といわれる。多くの命を救ってきた。しかし細菌も、たまたま耐性を得たものは生き残り増殖する。その進

化と新薬開発のいたちごっこが延々と続いている。切り札といわれる薬さえ効かない「スーパー耐性菌」も見つかっている。つまりは人と細菌の、生物間の生存競争なのだという。あなどれぬ敵との果てしない競争である。

文構造の柱は述語であり、命題は述語を中心に表わされる。名詞を述語とする無主語名詞文はモノ(名詞的概念)を核としてコト(命題)を描くものである。述語であることを主要な機能とするのは動詞であるが、無主語名詞文は動詞に代えて本来格成分たる名詞を据えている。R.クワーク、S.グリーンバウム(1977)は新しい情報を文末に配置しようとする文末焦点の原理を提唱している。通常、名詞述語で述べられる事態の主体は主語(主題)であるが、無主語名詞文では名詞述語の主体は明示されず、その分、単独に提示された述語名詞の指示対象を特立させ、際立たせる効果を持つ。名詞の指示対象を前景化するための効果的な情報構造である。また佐藤(1997、2001)は質規定が名詞述語文の基本的機能であると述べている。無主語名詞文は表現を簡潔にすると共に、話し手の感慨・評価を効果的に表出する操作でもある¹⁶⁾。

述語名詞の前景化、感慨の表出という無主語名詞文の機能は(31)～(33)のような名詞句独立文にも共通するものである¹⁷⁾。

(31) 静かなる溶暗。すべてを白くした頭上の光が、ゆるゆるとフェードアウトしていく。(8.28)

(32) 青春から朱夏をすぎて、秋は白秋。〈秋野明らかにして秋風白し〉の一節が中国唐代の詩人、李賀にある。その秋風を、日本では「色なき風」と表した。夏の湿気が払われて、透き通って寂びていく景色。(9.16)

(33) 両者の激突に遺恨も絡み、水膨れの党に一つの区切りがつく。国民の思い、厳しい経済とかけ離れた政争。その熱さと寒さは、冬の花火を思わせる。(9.1)

7. 終わりに

日本語は主語を必須としない言語であり、語順(文節順)に強い拘束のない言語である。本研究ではそうした日本語の性質を具現する文構造を、主語不在文の実態という側面から

¹⁶⁾ 無主語名詞文の中には僅かながら、先の(20)(21)のような事象叙述的なものや、「少女の日記は(明日からは、家屋疎開の整理だ。一生懸命がんばろうと思う)と結ばれている。13歳。(これを書いたのは: 稿者)原爆で亡くなる前日だった。」のような指定文的なものもある。指定文というのは、前項ないし後項の一方で提示された命題において欠落している情報を、他方で充たす文である。

¹⁷⁾ 名詞句独立文かコピュラを省略した無主語文かの境界は画然としない。日本語の「雨!」と「雨だ。」の間には明確な区別がないが、中国語では区別するという(張平氏談)。また、名詞句独立文の主名詞は、英語では主語、動詞の目的語、前置詞の目的語、動詞句、副詞句、連体句と、さまざまな形に訳されており、名詞句のみを独立させる表現形式は採用されていない。ちなみに(31)では原文の名詞句独立文は後文に融合されており、(32)(33)の名詞句独立文の主名詞は主語として訳されている。(31→The white-hot glare that fills the world starts fading quietly and slowly. 32→With the humidity of the summer gone, the landscape becomes transparent and deserted. 33→This hot and cold political battle has nothing to do with what the public wants or the harsh economic times.)

観察し、以下のことを述べた。

- ①日本語の主語不在文に主語相当句内在文・主語無表示文・無主語文・名詞句独立文・引用句独立文の5類型が認められた。
- ②無主語文には、名詞述語が多く関わっている。
- ③無主語名詞文および名詞句独立文は主名詞を前景化するものであり、主観性を帯びている。

無主語名詞文は、高文脈、主要部末端型、情報構造重視型、単肢型、情意的、名詞指向的(林1995、金2003)などと言われる日本語の特質を集約的に具現しており、英語との差異を際立たせる構文に名詞が大きく関わっていることを示している。主語の有無を調べるという本稿の作業を通じて浮かび上がってきたのは、つまるところ相対的な日本語の名詞指向性であった。

日本語教育との関連で付言するならば、母語の如何に関わらず、学習者の産出する文が不自然と感じられる要因の一つに主語を立てすぎることが挙げられる。無主語文の習得は発想を異にする学習者にとってはかなり困難なものであろう。

なお、本研究の結果にはジャンルの特性が関わっていると考えられる。また、無主語文は日本語の専売特許ではない¹⁸⁾。今後さまざまな言語との対照を含め、さらなる追究を心がけたい。

資料

「和英対照・天声人語」2010年8月21日～9月28日分、及びその英訳版

(<http://astand.asahi.com/asahieng/jetenjin.html>)

『女社長に乾杯!』の会話文(赤川次郎著、CD-ROM『新潮文庫の100冊』による)

『文藝春秋』77-04 巻頭随筆 文藝春秋

国立国語研究所(2011)『現代日本語書き言葉均衡コーパス 少納言』

(http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/search_form)

参考文献

池上嘉彦(1983)「テキストとテキストの構造」『日本語教育指導参考書11 談話の研究と教育I』国立国語研究所

林八龍(1995)「日本語と韓国語における表現構造の対照考察—日本語の名詞表現と韓国語の動詞表現を中心として—」『日本語の研究』明治書院

V. マテジウス(飯島周訳)(1981)『機能言語学』桐原書店

奥田靖雄(1985)『ことばの研究・序説』むぎ書房

¹⁸⁾ 例えばマテジウス(1981)はチェコ語の無主語文として4種を挙げている。

- 奥津敬一郎(1975)「主語とは何か」『言語』4-3
- 上林洋二(1988)「指定文と措定文—ハとガの一面—」『筑波大学文芸言語研究・言語編』14
- 北原保雄(1975)「日本語の主語」『言語』4-3
- 金恩愛(2003)「日本語の名詞志向構造(nominal-oriented structure)と韓国語の動詞志向構造(verbal-oriented structure)」『朝鮮学報』188 天理：朝鮮学会
- 久野暲(1978)『談話の文法』大修館書店
- R.クワーク、S.グリーンバウム(池上嘉彦訳)(1977)「焦点、主題、強調」『現代英語文法 大学編』紀伊國屋書店
- 国立国語研究所報告23(1963)『話しことばの文型(2)—独話資料による研究—』秀英出版
- 坂原茂(1990)「役割、ガ・ハ、ウナギ文」『認知科学の発展 Vol.3 特集メンタルスペース』講談社
- 佐藤里美(1997)「名詞述語文の意味的なタイプ—主語が人名詞の場合—」『ことばの科学 8』むぎ書房
- 佐藤里美(2001)「テキストにおける名詞述語文の機能—小説の地の文における質・特性表現と〈説明〉—」『ことばの科学10』むぎ書房
- 柴谷方良(1985)「主語プロトタイプ論」『日本語学』4-10 明治書院
- 鈴木重幸(1972)『文法と文法指導』むぎ書房
- 鈴木重幸(1992)「主語論をめぐって」『ことばの科学5』むぎ書房
- 砂川有里子(1990)「主題の省略と非省略」『文藝言語研究(言語篇)』18 筑波大学
- 盛文忠(2006)「日本語の主語と中国語の主語はどう違う?」『言語』35-5
- 時枝誠記(1954)『日本文法 文語篇』岩波全書114
- 永野賢(1985)「文章における主語の連鎖」『日本語教育』56
- 西村義樹(2004)「主語をめぐる文法と意味—認知文法の観点から—」『朝倉日本語講座6 文法2』朝倉書店
- 西山佑司(1990)「コンピュータ文における名詞句の解釈をめぐって」『文法と意味の間 国広哲弥教授還暦退官記念論文集』くろしお出版
- 仁田義雄(2010)「日本語の主語をめぐる」『日本語文法著作選 第4巻 日本語文法の記述的研究を求めて』ひつじ書房
- 丹羽哲也(2004)「主語と題日語」『朝倉日本語講座6 文法2』朝倉書店
- 野田尚史(2004)「見えない主語を捉える」『月刊言語』33-2
- R.de ボウグラン・W. ドレスラー(池上嘉彦ほか訳)(1984)『テキスト言語学入門』紀伊國屋書店(1981 *Introduction to text linguistics*. Longman: London.)
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志(2000)『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 松本克己(1991)「主語について」『言語研究』100 日本言語学会
- 三上章(1953)『現代語法序説』刀江書院(1972復刊 くろしお出版)

- 三上章 (1959) 『新訂版現代語法序説—主語は必要か—』 刀江書院 (『続・現代語法序説 主語廃止論』として1972復刊 くろしお出版)
- 三上章 (1970) 「10. 省略の法則」『文法小論集』 くろしお出版
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店
- 湯川恭敏 (1971) 「日本語と「主語」の問題」『言語学の基本問題』 大修館書店
- Li, C.N., S.A. Thompson (1976) Subject and Topic: A New Typology of Language. In Li, C.N. (ed.) *Subject and topic*. London/New York: Academic Press.